

鈴子業平竹と、池上・尾崎の両先生

高橋庄一

明日天気良かったら植物採集に行かないか、と尾崎先生に誘われ、翌日出掛けた。どこでどう集まったかは記憶にないが、最初の採集地は空き家になった鉄道官舎であった。なん軒かの空き家の庭をみて回るうち、玄関先に斑入の竹を見つけた。池上先生が、これは中国原産の竹で日本では鈴子業平竹とゆう珍しい竹である、と言われた。珍しい竹であるならば、空き家でもあることだし、いらなくなったから置いていったのだろう、と勝手に判断し、両先生と小生の三人で引っこ抜き、三等分し持ち帰った。池上先生と小生が移植したのは枯死。尾崎先生の分だけがかろうじて生き残り、現在も尾崎邸の物干し場の前に繁茂している。その鈴子業平竹の莖莖ったのを引き抜いたり、伸びすぎた幹を剪定したりする度に、鉄道官舎を思い出す。その官舎跡地に鉄道病院が作られ、その病院も現在は取り壊されたように記憶している。現在その場所を通ってみても、鉄道官舎があった場所は見当もつかない。

鉄道官舎を後にして、信濃川沿いに港に向かって歩きながら採集したのを記憶している。港からは何処をどう歩いたかは記憶にないが、砂丘の松林の中で鈴虫草を採集したのを鮮明に記憶している。現在の山の下地区の下山あたりの砂丘であったろうか。後年それを思い出し、山ノ下のじゅんさい池付近から新潟空港にかけての松林を、一日かけて鈴虫草を捜し回ったが、一本も見つからなかった。

飛行場に見える砂丘で腰をおろし、おにぎりを頬張りながら、飛行場から飛び立つ米軍のジェット機が、尻尾から黒い煙を吐き出しながら飛び立つのを、飽かず眺めていた。終戦の年の7月下旬か8月上旬かに、新潟が米軍の艦載機の空襲を受けた。その時、たまたま港にいて空襲を受けた、爆弾の投下は無かったが、機銃掃射を受けた。東港線の万国橋の下に逃げ込み無事であったが、風防眼鏡を掛けたパイロットの顔が判る位の低空での機銃掃射は恐かった。その時の米軍機は、ズングリした機体のグラマンと、ほっそりした機体のロッキードで、共にプロペラ機であった。5、6年たってプロペラ機は姿を消し、ジェット機に変わった。

砂丘の上で握り飯を食べたら、新潟港が終戦の年に艦載機の空襲を受けたことを思い出したことを、記憶している。地下足袋を履き、ゲートルを脛に巻き、笠をかぶり、今思えば珍妙なる出で立ちで、肩に胴乱を担いだ三人の姿は、現在ならば周囲の人から奇異なる眼差しで眺められるのであろうが、落ち着き始めたとは言え、戦後の混乱期であってみれば当たり前のことで、又、まわりの人も他人のことを気にする程の余裕も無かったであろう。五十年以上

前のことで、小生も紅顔可憐？な少年から青年期の頃のことで、その夏の日、一日の採集行の記録は一切残っていない。鉄道官舎跡から採集した鈴子業平竹が、尾崎邸に現在も繁茂して残っているのと、尾崎邸より移植した小生宅の竹が、唯一の記録である。

尾崎先生と鳥屋野瀧

高橋庄一

未だ耕地整理もされておらず、鳥屋野瀧は満々とした水を湛えていた頃の話である。ある日、先生と二人で瀧の植物採集に、おにぎりを持って出掛けた。青いペンキを塗った胴乱を肩に、鳥屋野瀧を一巡りし、長瀧部落を通った。胴乱を肩にした我々の姿を見た長瀧部落の人が、税務署の酒検査（密造酒の取締）と間違えたのである。一瞬にして部落中に「酒検査が来た」の情報が、漏れなく伝わったそうである。大変ご迷惑をお掛けしたと、今でも恐縮している。一瞬にして部落中に情報が伝わる部落の連帯感は、現在失われているように思われる。古き良き時代と思うか、どうかは人それぞれの判断に任せよう。その採集行の時、先生に教えてもらったノボロギクは、今でも鮮明に記憶している。

瀧の周りに排水機が何箇所もあり、水田の水を鳥屋野瀧へ汲み出していた。水位は現在より4?5メートル高かったので、満々とした水を湛えた瀧であったが、今は信濃川、小阿賀、阿賀野川に挟まれた地域の下水の溜り場となっている。だからといって昔が良かったわけではない。紫竹山の排水機が作られ、鳥屋野瀧の水位が下がり、瀧でなく下水の溜り場となってしまった。その紫竹山の排水機も今は無くなり、親松排水機になり、その下流に新潟市の水道水の取水口がある。新潟市の水道は旨くないわけである。水田の乾田化にともない、水位はドンドン下がり栗ノ木川も無くなってしまった。現在の栗ノ木川は川でなく、ただの下水路でしかない。板合わせ（板で作った川船）で鳥屋野瀧、栗ノ木川を通り、沼垂へ船で行ったもので、昔は板合わせが、物資の重要な運搬手段で、現在の車社会では想像も出来ない事だろう。

5月25日の鳥屋野瀧植物観察会に、鈴木女史に誘われ参加し、講師の尾崎先生のお顔を拝見しているうちに、昔の鳥屋野瀧の風景が脳裏をよぎり、先生のお顔を眺めているうちに、我々二人共、年をとってしまったの感を強くした。でも、二人共、最初から年をとっていたわけではない。先生と鳥屋野瀧の植物採集に歩いた頃は、血気盛んな青年と紅顔可憐な？少年であったはずである、五十年余も昔から草をいじり、葉っぱの裏に毛があるだの、ないだのたわいもない事に五~六十年も時間を費やしてきた先生も小生